

脊椎脊髄術中・術後のトラブルシューティング 第2版

徳橋泰明，三井公彦 ● 編

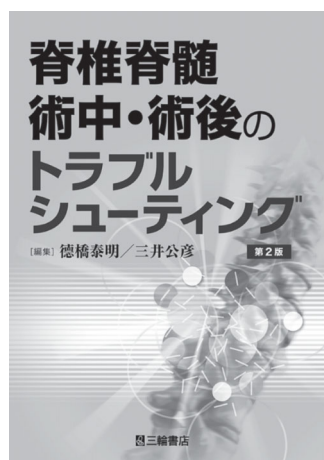
〔評者〕米延策雄(滋慶医療科学大学院大学医療管理学研究科)

本書は『脊椎脊髄術中・術後のトラブルシューティング』の第2版である。いわゆる，トラブル対策集の第2版は稀である。なぜなら，残念ながら人は同じ轍を踏み，ある程度広がった技術ではアクシデントもその対応も定型化し，知識の更新が少なくなるためである。脊椎脊髄手術もこの数十年間で広く普及し，整形外科領域での手術件数の約15%を占めるようになった。一方では，技術の進歩や患者層の高齢化など，その様相が大きく変化しており，11年ぶりとはいえ，時宜を得た改訂である。しかし，この改訂版が優れているのはそれだけではない。編者の熱い思いとそれに応えた経験豊富な執筆者(外科医)の努力が詰まっている点にある。

内容をみてもみる。基本的にはカテゴリー(血管損傷，神経障害，感染，硬膜損傷，instrumentationなど)ごとに，具体的なトラブルとその対応策という構成である。項目にもよるが，まずその予防策があり，そしてトラブルが生じた場合には，いかに対応するか。豊富な経験を通じてしか得られない考え方と対応策が述べられている。対応策は具体的なテク

ニックがわかりやすいイラストで示されている。対応策でいくつかの見解がある場合には，複数の項目が設けられているのもよい。

社会の中で機能しているシステムが進歩するにつれて巨大化し，いったん事故が生じた場合には，その被害も激甚となってきた。それへの対応として複数のアプローチが開発されている。中でも，人が関わる部分は大きく，ヒューマンファクターという言葉で研究が進められており，その成果は外科領域でも大いに参考となる。トラブルに際してわれわれはどのように状況を認識し，対応を考え，意思決定をしているのだろうか？意思決定のモデルには，認識主導型(直感型)，ルールベース型，比較選択型，創造的意思決定型の4つがあるという。ここでこれらを詳しく述べる余裕はないが，手術トラブルで多くみられるそれは直感型といわれている。なぜなら，術中にトラブルと認識したとき，それは目の前に問題が突発した状態であり，状況を読み，あれこれ考える間もなく過去の経験(直接体験だけでなく読書や伝聞など)による知識を含む)に基づいて直ちに行動する，正に直感的に意思決



定して行動する必要があるためである。これを考えれば，直接体験できないトラブルとその対策はあらかじめ学んでおかなければ，働かない。脊椎脊髄手術をする先生には，手術書とともに本書を読んで手術に望んでいただきたい。

B5 366頁 2014年
定価：本体12,000円＋税
[ISBN 978-4-89590-472-8]
三輪書店刊